緑のダム　森林・河川・水循環・防災
蔵治光一郎・保屋野初子編
四六判　280 頁　定価 2730 円 2004 年発行
築地書館　03-3524-3731
ISBN4-8067-1300-7

「緑のダム」という言葉は耳に心地よい響きを持つが、本来ダムというものは治水や利水機能を発揮させるために建設されたものである。緑のダムがその機能を発揮するのかどうか、という点について研究者側の認識と、住民や行政側の認識に関する情報を整理・提供しようと試みたのが本書である。

評者は以前、本書の編者の一人が著した「森林の緑のダム機能（水源涵養機能）とその強化に向けて」に関して本欄で評したことがある。その時に、森林の機能に対する十分な知見は蓄積されており、緑のダム機能に関する科学的な説明は現状で十分可能であると述べた。しかし、本書においても「科学的な解明がなされているとは言えない」といった表現が散見される。さらに、重要な水文素過程に関する認識が研究者間で決してコンセンサスが得られているわけではないことも明らかになった。また、モデルに代表される定量的な解析に対する篤い信奉があることも伝わってくる。

森林は複雑な対象であり、決して一般性のみで説明できるものではない、という認識は現在の科学の流れのなかでは傍流に過ぎないのであろうか。地域性を重視しながら、空間的フレームワークのなかに位置づけて理解するという地理学の手法こそ、緑のダム機能の理解に役立つと考えているのだが。個別性に直接向き合う科学こそが、成果をダイレクトに地域に返すことが可能であり、その成果の蓄積によって環境の総合的理解が可能になる。緑のダムもそのような科学の分野ではないだろうか。

一方、住民や行政側からの情報では、緑のダム機能を真摯に理解しようとする姿勢を読み取ることができる。かつてあったような、主観に基づいて情緒的に主張するという時代ではなくなってきたようである。いろいろな環境問題が対立から協調へと歩みを変えているように、緑のダム論争も研究者と住民や行政との協力に向かって進んでいる。もちろん、そこには本書の出版に至る過程における編者らの努力がある。重要なことは、事実は現場にある、ということである。最近腰が重くなってきた評者も、外に出る必要性に迫られているようだ。　（近藤昭彦・千葉大学）